

はじめに

家族との関係は子どもが成長していく上でとても重要であり、家族が子どもに与える影響はとてつもなく大きい、と筆者は考える。両親はいるのか、片親なのか、兄弟姉妹はいるのか、核家族なのか、共働きか、高所得か、低所得か、など様々な事柄が要因となって、子どもに良くも悪くも影響を与えているだろう。

教育学においては、親の所得と子どもの学力がきれいな比例の関係にあることが実証されており、さらには、とくに経済的困難を抱えている生活保護受給世帯に育つ子どもたちや、児童養護施設に育つ子どもたちの、極端な学力不足が報告されている。

子どもの健康状態についても、貧困層の子どもとそうでない層の子どもには、統計的に有意な差がある。

また、貧困層の子どもが多くが、未成年のうちに実家から離れていく。中卒や高校中退で住み込みなどの職に就く場合もあるが、実家自体が子どもにとっての安息の場ではなく、逃げようとして実家から出てしまう場合も多いらしい。児童虐待のような深刻なケースでなくても、親が再婚をして義理の親と上手くいかなかったり、実の親との関係が悪化していたり、実家自体が経済的に困窮していたり、といった様々な理由で実家が機能しなくなっていることが考えられる。

ここでは、貧困な親が子どもに与える影響について見ていき、各々の問題と「子ども食堂」を絡めて考えていく。

## 本論

貧困層の子どもたちの健康状態について考えていく。全国の小中高校の養護教員の団体は、怪我や病気をしても病院に行けない子どもや、常に空腹の子どもなどについて、『保健室から見える子どもの貧困の実態』というリーフレットにまとめている(全日本教職員組合養護教員部 2009)。ここで紹介された事例をいくつか引用する。

・ぜんそく発作を起こした子どもの親と連絡をとろうとしたが、家〔の電話〕も親の携帯電話も止められていて連絡が取れない。ようやく迎えに来た父親は、呼吸器のみで薬は持参せず、その後病院へ行ったかも確認できない。父親は病気をして無職となり、給食費も滞納し、観劇や遠足も費用が払えず欠席させている。子どもは親をかばって、「保険証がなく病院にいけない」とはなかなか言わない。

・夏休み中にやせる児童生徒が、ここ三年くらい増加している。休み中は、十分な栄養がとれないためではないかと思われる。(給食が一日の栄養源という子がいる)

・生活保護家庭 42%、一人親家庭が 50%の高校。(永久歯)32 本中 20 本がむし歯でも医者に行かない、視力が 0.06 でもメガネをかけない。親も病院に行くより、借金を返すことが先と病院に連れて行かない。生活が大変になると、最初に切るのは医療費。

これらの事例から、貧困層の子どもたちは、親が医療費まで払えないため、病気や怪我の治療をしてもらうことなく、そのまま放置されるということが分かる。なかでも一番気にな

ったのは、永久歯 32 本中 20 本がむし歯でも医者に行かない、というものだ。筆者もむし歯になり、むし歯を治療せずにそのまま放っておいたことがある。少しだけ痛みを感じる程度だったので、3 か月ほど痛みを我慢しながら生活していたが、とうとう痛みがひどくなり、夜も眠れないほどの痛みが筆者を襲いました。このように、放置するほど激しい痛みが出てくるむし歯が、20 本もあるにもかかわらず歯医者に行けず、治療してもらえないなんて考えただけでも恐ろしい。あるテレビ番組で、昔貧乏だったタレントさんが貧乏だった子ども時代のエピソードを語るというものがあつた。そこでタレントさんは、むし歯になった歯は自分で抜いていたと話していた。貧困で歯医者に行けない子どもは、どうやったら痛みがなくなるか自分で考え、このような荒療治をする場合もあるようだ。

2008 年秋には、全国に 15 歳以下の無保険(健康保険証をもたない)の子どもが約 3 万人存在することも明らかになった(厚生労働省 2008)。この無保険状態については、早い対応がなされたものの、自己負担の高さによる子どもの受診抑制は依然として残る。多くの自治体は子どもの医療費の自己負担分を助成しているが、その運用はばらばらであり、いったん窓口で親が立て替えなければならぬ、いわゆる窓口負担が発生したり、対象となる子どもの年齢に制限があつたりして、依然として金銭的な理由で医療サービスを受けられない子どもが日本には存在しているのである。

児童福祉の現場からは、ネグレクト(育児放棄)などの児童虐待や、不登校などのさまざまな問題が續々と報告されている。不登校・児童虐待などのリスクは、どのような世帯にも起こり得るものの、そのリスクは、親が就労問題、経済問題などをおかかえている世帯とくに高い(山野 2008、子どもの貧困白書編集委員会 2009)。

次に、大人が子どもに与える悪い影響(ストレス)について考えていく。

子どもの発達を蝕む毒性ストレスはそれ自体、親の生活の中での大きなストレス(臨床的な抑うつのような深刻なものと、日常の厄介事の積み重ねの双方)の反映であることが典型である。子どもの生後 1 年目の母親のストレスは、乳児～母親間の愛着や保育に対して破壊的な影響を与える。

ではここで、近年の知見について検討していく。

・貧困下で成長した子どもは、ストレスホルモンとして頻繁に研究されているコルチゾールのレベルが上昇するリスクがある、ということを示す証拠が増加している。貧困は無秩序という文脈を生み出すのに貢献し、それが子どもの生理機構に影響を及ぼしているように見える。

・幼少期に貧困ストレスにさらされていた成人では、脳内で感情調節を司る部分が障害を受けていたことが最近の研究で見出されている。

・カナダの研究所の知見では、下層また上層階級出身の子どもの脳波の差異からは、下層が単純な課題に集中するのに困難が多いことが示唆されており、新たな脅威に備えて環境監視を持続的に維持するよう脳が訓練されてきた結果であることが明らかだとしている。

・もう一つの最近の研究の報告では、貧困下に生活している幼児の小規模サンプルで、裕福な出自の子どもと比較したときに脳の成長が遅く灰白質が小さいことが MRI で確かめられているが、この知見の一般化のためにはさらなる研究が必要である。

・所得が多く、教育水準の高い家庭の子どもは、親の語彙が多く、また複雑な構文を使って

いるために、豊かな言語的相互作用からの恩恵を受けている。ある画期的な研究では、児童発達の専門家がカンザスの42家族を追跡し、それら家族の日常の言語的相互作用を毎月一時間、三年間にわたって慎重に観察した。彼らの推定によれば子どもが幼稚園に入る時点で、専門職についている家族の子どもが耳にした単語は、労働者階級の親をもつ子どもに比べて1900万語、そして生活保護を受けている親の子どもに比べて3200万語多かった。

・全国調査の一つによれば、中級階級の子どもの72%は学校が始まる時点でアルファベットを知っているが、対して貧しい子どもでは19%にすぎなかった。

これらをまとめると、教育水準の高い親は低い親より、テニスで例えるなら子どものサーブに対してボレーで返す可能性が高い。

幼児の健全な脳発達には、面倒見の良い、一貫した大人とのつながりを必要とする。このギブ-アンド-テイク式学習のカギとなるメカニズムを、児童発達の専門家「随伴的互酬性」(あるいはもっと単純に「サーブとリターン」の相互性)と名付けている。テニスの試合のサーブのように、子どもが何らかの信号を(例えば赤ちゃん言葉で)送信し、そして大人が(例えば発声し返すことで)反応したとき、子どもの脳の発達中の回路に検出可能な痕跡が残される。このような学習の多くは、もちろん言語以前のものである。しかし研究によれば、数学的、言語的能力双方の最初期における大人とのインフォーマルな相互作用を通じて、フォーマルな訓練よりも効率的に獲得されることが示されている。このような相互作用の昔からの典型例は、親がよちよち歩きの子どもの読み聞かせをしている最中に絵を指さしてその名前を呼び、子どもがそれを返すように促されるようなときのものである。

親による認知的刺激は、最適学習にとって核心的なものである。頻繁に自分に耳を傾け、話してくれるような親の元で育った子どもは、まれにしか会話しようとしなない親の子どもより進んだ言語能力を発達させている。

神経科学者や発達心理学者が確認した、脳を基盤とした能力のなかでもとりわけ重要な集合のことを、彼らは「実行機能(エグゼクティブ・ファンクション)」と呼んでいる。それは航空交通管制のような活動であって、集中や、衝動の制御、精神の柔軟性、そして作業記憶に現れている。こういった機能は脳の中でも前頭前皮質と呼ばれる部分に集中しており、携帯電話が鳴ったときにこの本を置き、サッカーが終わったら子どもを迎えに行くことを記憶にとめ、そして続きを読むことに戻るのを可能にしている。実行機能に生じた不全は、学習障害やADHD〔注意欠陥・多動性障害〕といった状態として現れる。

支援的な養護者のいる通常的环境下では、実行機能はとりわけ3歳から5歳の間に急速に発達する。しかし、その時期に深刻で慢性的なストレスを経験した子どもは実行機能が傷つく可能性がより高くなる。

この研究による重要な合意の一つは、幼少期に身につけられた能力は根本的なものであって、のちの学習を効率的なものにするということである。したがって、このような時期の経験はとりわけ重要である。反対に、子どもの年齢が上がっていくと脳は変化しにくくなっていく。そしてこの事実からの帰結の一つは、早期の介入の方が思春期段階での介入よりも、強力で費用対効果が高いということである。

知的発達と社会情緒的発達は、年少のうちから分かちがたく結びついている。いわゆる非認知的能力(達成心や、社会的感受性、楽観性、自制、誠実性、情緒的安定性)は人生におけ

る成功に対して非常に重要な意味を持つ。それは身体的健康や学業成果、大学入学、就職、そして生涯所得の向上を導き、また、人を厄介事、そして収監から守る可能性がある。

面倒見のよく応答性の高い大人と子どもによる相互作用が、発達がうまくいく上で主要な要素となっている。

また、先ほどの知見からわかることは、裕福な家庭の子どもは、貧困の中で育つ子どもよりも毒性ストレスにさらされることが少ない。

ここからは、貧困層の子どもの多くが、未成年のうちに実家から離れていく、という問題について考えていく。

実家が安息の場でない場合、いったん「自立」した子どもは、何か問題があった時に、「帰れる家」がない。そのため、一気に生活困窮し、ホームレスとなったり、女子の場合には、援助交際やキャバクラなどの風俗産業に取り込まれてしまったりする危険性も高い。学校という社会との絆が切れてしまっており、家族のセーフティネットもないのであれば、未成年であるにもかかわらず、頼れる場所は皆無なのである。

ゼミで、樹木希林さん主演の映画「あん」を観た。この映画には、登場人物の一人として、中学生の女の子・ワカナがでてくる。ワカナは、映画を観たところ母子家庭だと思われ、母親と二人でアパートに暮らしており、とても裕福には見えず、どちらかというところ貧困に思えた。ワカナの母親は家事をまともにやっているようには見えず、家にいる時は男と電話をするばかりであった。このような状態で、ワカナが暮らす実家という場所は、観ている側からしたら居心地が良いとはとても思えない場所であった。そのような状況の中でも唯一ワカナの安らぎとなっていたのは、飼っていたカナリアの存在だと思う。カナリアの世話をしている時は、心を許しているような、そんな印象を受けた。ただ、そのカナリアも後々アパートでは飼えなくなり、誰かに譲るか、逃がすことになってしまう。

そんなワカナが実家とは別に、居場所のようにしていたのは、どら焼き屋「どら春」だった。ワカナはそこの常連で、学校帰りに寄って、店長の千太郎からその日のどら焼きの出来損ないをあるだけもらっていたのだ。そのような関係もあり、ワカナは千太郎を頼りにしているように見えた。また、「どら春」でアルバイトをする老女の徳江とおしゃべりをするなど、「どら春」はワカナにとっての居場所となっており、千太郎や徳江がワカナにとって頼れる大人だったのである。

ワカナは実家から離れなかったが、ワカナのような環境で暮らしている未成年が、実家から離れたくなるのだろうと思った。居心地の悪いところにずっと居つづけることは誰もしたくないだろうから。

家庭だけでなく、学校にも居場所がない人たちがいる。そんな人たちがグループをつくって、事件を起こすことがある。例えば、こんな事件があったようだ。高校に行かない4人の女子がグループをつくる。彼女たちは、親から虐待を受けたり、親の経済力が無かったり、自分たちには親がいないから、とグループをつくる。しかし、そのグループの中の一人が殺される。その理由は、LINEでのやりとりが原因だった。LINEのやりとりで傷ついたり、怒ったり、そこから相手を殺してやるという会話になり、実際に殺してしまう。小さなコミュニティの中で、他者との関係の作り方をしっかりと学ぶこと・学ばせてもらうことができなかった結果がこのような事件につながったひとつでもあるだろう。

今までに紹介してきた、貧困で食事に困っている子ども、家にも学校にも、どこにも居場所のない子どもたちのためになるかもしれないのが、「子ども食堂」である。「子ども食堂」は、食事を無料またはワンコインで払えるほどの金額で提供してくれるボランティア活動だ。だいたい月に数回の開催となっている。開催する人たちによって「子ども食堂」の雰囲気もそれぞれ違い、予約制だったり、当日参加制だったり、そこも違ってくる。予約制だと、お客さまが何時に来られるかが分かるので、その時間に合わせて食事を準備すれば、できたてのごはんを提供することができ、食材も余りが出ないようにできるので、そこは良いところだと思う。食事を提供するだけでなく、みんなで宿題をやる時間をつくったり、サッカー教室などとコラボレーションをしていたりするところもあり、「子ども食堂」の可能性はまだまだまだたくさんありそうだ。

実際に筆者が「子ども食堂」に参加して思ったことは、「子ども」たちのためになることはもちろんのことだが、開催する側のボランティアの方々、また子どもと一緒に参加する親御さんなど、いろいろな人にとってプラスになっていると思った。子どもたちは、食事をするとともに、「子ども食堂」で知り合った友達と遊ぶこともできる。「子ども食堂」で新しいつながりが生まれ、友達が来るから次も行こうという風になり、いつしか自分の居場所の一つになることもあるだろう。月に数回だとしても、自分が通っている学校では会えない友達(自分とは別の学校に通っている)と会えるというのはわくわくするだろうし、毎月の楽しみの一つになる。筆者は小学校の頃、習い事でしか会えない友達と、習い事が終わった後に遊ぶのが本当に楽しかったし、毎週の楽しみだった。そのような関係を築くことができるのも「子ども食堂」の良さの一つと言えよう。実際に、小学生の頃から「子ども食堂」に参加していた人が、中学生や高校生になってからも「子ども食堂」に訪れ、受験での悩みなどを「子ども食堂」を開催しているボランティアの方に相談をしにくるそうだ。「子ども食堂」で信頼関係を築いていけたことで、自分の親以外にも頼れる大人ができることがあるのだ。このように居場所がなかった子どもたちも、「子ども食堂」が一つの居場所となることがあるかもしれない。

「子ども食堂」は子どもたちだけを対象としているわけではない。

まず、子ども連れの親御さんたちも参加できる。普通のレストランで外食するよりも安く済ませることができるので、経済的に家庭にも優しい存在となっている。そして、参加した親御さんどうしの交流の場にもなる。育児のことで悩んでいることや、他にも学校での話題などを交換でき、親御さんたちの居場所にもなり得る。子どもと一緒に参加しなくても、奥様方だけでお集まりになり、食事をしながらお話を楽しんでいらっしゃる方たちもいた。

「子ども食堂」と聞くと子どもがいないと参加できないと思う方もいると思うが、決してそういったわけではない。

「子ども食堂」は、ボランティアの方々の居場所にもなっている。「子ども食堂」のボランティアをしている方々は、いきいきとしているように見えた。筆者も「子ども食堂」のボランティアに参加させていただいたときに、子どもたちが「おいしい」とうれしそうに言ったり、食後におしゃべりをしたりしたときは、こちらも笑顔になれたし、筆者がごはんをつくったわけではないのだが、おいしくてよかったと思い、うれしかった。また、子どもたちが元気にごはんを食べたり、遊んでいたりとすると、こちらも元気をもらえる。他のボランティアの方々も筆者と同じような気持ちでやっているのではないかな、と思う。

ある「子ども食堂」の主催者の方は、「子ども食堂」をやり始めてからいろんな人が援助をしてくださり、人の優しさにふれることができた、と語っていた。現代は、地域でのつながりもうすれていき、近隣で助け合うということが昔と比べてなくなってきているように思える。しかし、子ども食堂を開催するにあたって、近くのスーパーから差し入れをもらったり、寄付金を振り込んでくださる方がいたり、多くの方からの援助がある。こういった人の優しさにあらためてふれることができるのも「子ども食堂」の良さであるといえる。

## 結論

貧困の子どもたちが、「子ども食堂」に参加することができれば、学校の給食以外にもしっかりと栄養のとれる食事をする事ができる。また、居場所のなかった人は、新しい居場所となる可能性もあり、同世代の子どもたちとの関係だけでなく、大人との関係も築くことができる。

本当に貧困で困っている子どもたちを「子ども食堂」に参加できるようにすれば、根本からの問題を解決することはできなくても、少なくともプラスになることは多いだろう。そういった子どもたちをどうやったら「子ども食堂」に呼び込めるかが課題となっていくだろう。

今回のレポートを通して、親は子どもに、学力、健康、生活など、様々なところに影響を与えていることが分かった。筆者自身も親の影響を受けて育ってきたと思う。食事や健康管理などは親がしっかりとしてくれたため、今でも健康に暮らせている。親と暮らしていて、ストレスを感じることもあった(父と母が喧嘩をしているときなどは気を使ってストレスがたまったり、イライラもした)。人生において、親が子に与える影響は将来を変えるほどにまで大きいと考えられる。良い影響ならいいが、悪い影響ばかりを与える親であれば、親以外の頼れる大人が近くにいる、気にかけてもらえると良い。また、安全で信頼できるコミュニティに所属していけると良いだろう。

## 参考文献

阿部彩「子どもの貧困Ⅱ—解決策を考える」  
ロバート・D.パットナム「われらの子ども」

## 子ども食堂報告

### 心の子どもごはん

#### 1 子ども食堂紹介

場所：名古屋市守山区小幡南 2 - 5 - 34

2 年前の 9 月から開始(現在 2018 年)

#### 予約制

参加日時：2018 年 12 月 1 日(土)、12 月 15 日(土)

参加費：幼児 無料

小中学生 100 円

高校生・大人 300 円

献立：12 月 1 日 ご飯、ハンバーグ、ブロッコリー、ハム、お肉、汁物、ごぼう、みかん、金柑

12 月 15 日 カレーライス、サラダ、オレンジ、リンゴ、お持ち帰りのケーキ

参加・記録者；大畑伸太郎

#### 2 当日の流れ

17 時～17 時半頃からボランティア集合・準備

18 時頃から第 1 陣開始～19 時前に片付け完了

19 時頃から第 2 陣開始～20 時前から片付け、ボランティアの夕食準備、食事～後片付け、解散

#### 3 食材、献立

- ① 食材 寄付されたものを使用(スーパーが無料で提供、上限はないが 5000 円までと決めている)。

寄付金も募集しており、たくさんの方々が寄付をしてくださっています。

- ② 献立 献立は開催日ごとに決めてあります。

#### 4 感想

予約制なので、幼児、小中学生、大人、それぞれ何人来て、各家族どこに座るか等もあらかじめ決められているので、配膳もしやすく、やりやすかったです。1 日には学生のボランティアの人が 5 人程参加して大勢いたのですが、多すぎると通路などで邪魔になり、あまり身動きも取れないので、ある程度の少人数で回した方が良かったと思います。子ども食堂を開催している中村さんが、いろいろな人が支援してくださるので、あらためて優しさに触れることができた、というような話をしてくださったことが心に残っています。

12月1日



12月15日

